

明照大師嘉号請願考

野 田 秀 雄

明治四十四年執行された宗祖法然上人の七百年大遠忌は、江戸時代の大遠忌とは様々な意味で異なっている。さき
にこの大遠忌について、とくに布教伝道に焦点をあてて論じたことがあり、^①『知恩院史』にも簡潔にその当時の有様
が記述されている。^②

本稿では、従来の嘉（徽）号請願が、宮内省といかなる連繫をとりながら進行していったかを、とくに最近発見さ
れた知恩院の新出史料の紹介（次節）に重点をおきながら、その経緯をあらためて確認するとともに、先人の涙ぐま
しい愛宗護法を仰ごうとするものである。嘉号をめぐる論文としては、前回の六百五十年大遠忌に関して、宝
田正道「慈教大師徽号勘文攷」^③があるが、それは江戸時代最後のものである。

新史料は「浄土宗開祖円光大師七百年忌ニ付嘉号恩賜請願」を最初にして数点の内容から成っている。とくに表題
はなく、「総本山知恩院」と印刷された青色野紙に書かれ、袋綴にした二十枚（内一枚は白紙、一部紫色の野紙を使
用）と、同紙を利用した華頂宮家人宛の書状の二部があり、末尾に参考史料として紹介するのがこの書状である。そ

これらの内容は次の通りである。

〔一〕 浄土宗開祖円光大師七百年忌ニ付嘉号恩賜請願

〔二〕 書状写

〔三〕 歴朝御崇信ノ事歴要略

〔四〕 円光大師遺跡ニ対スル皇室ノ関係

〔五〕 勅書写

〔六〕 御忌詔勅

〔七〕 謚号御宣下次第

〔八〕 古今謚号宣下ノ重ナル類例

このうち〔二〕を除くすべてが宮内庁書陵部所蔵の『重要雑録』^④にあり、知恩院の控と全く同筆同文である。この『重要雑録』には、本件に関する他の史料もあわせて収録されており、これらを集約して『明治天皇紀』第十二^⑤には次のような記述がある。

明治四十四年二月二十七日

浄土宗総本山知恩院、本年三月・四月兩次に亘りて開祖円光東漸慧成弘覚慈教大師^{法然}の七百年遠忌を修せんとするを以て、其の年忌加号の先蹤を斟酌して明照大師の号を加謚したまふ

二

〔一〕 浄土宗開祖円光大師七百年忌ニ付嘉号恩賜請願

謹ミテ宮内大臣閣下ニ啓ス、来ル明治四十四年我宗祖勅謚円光大師七百年御忌ノ大典ヲ修行スルニ際シ、緬カニ古

来ノ盛儀ニ鑑ミテ遺漏無カラシコトヲ期シ、且暮苦慮措ク所ヲ知ラズ、窃カニ大師ノ芳蹤ヲ繹ネテ、歴代ノ朝恩軫々深厚ナルヲ仰ギ奉リ、祖道ノ益々恢興センコトヲ希フテ、報本ノ至情禁スルコト能ハス、茲ニ微衷ヲ披キテ、敢テ閣下ノ明鑑ヲ煩ハシ、虔ミテ嘉号御下賜ノ執奏アラシコトヲ懇請ス、伏シテ惟ミルニ、今上陛下、夙ニ祀典ヲ崇ミ、仁慈ヲ重ンジ、以テ億兆ヲ率キサセ給ヒ、忠孝節義苟クモ徳ヲ後代ニ遺ス者ハ、旌賞途備ハリテ枯骨亦感泣セザルハ無シ、宏謨ノ淵源已ニ遠シ、忠臣孝子ノ輩出限リアル可ラズ、洵ニ聖恩窮リ無ク、率土均シク浴ス、古聖王ノ治ト雖何ヲ以テカ之ニ加ヘン、迂納現有幸ニ聖世ニ生ル、齡八旬ニ及ヒテ事ニ堪ヘズト雖、敢テ殘軀ヲ捧ゲテ祖廟ニ侍シ、闔宗ヲ統ブルモノ他無シ、蓋シ沙門ノ徒其ノ祖徳ヲ顯彰シテ、報本ノ要務ヲ後嗣ニ伝ヘ、以テ法灯ヲ百世ニ輝カサンコトヲ勉ムルハ、猶ホ国家祀典ヲ尊崇シ、忠孝ヲ推奨シテ、範ヲ後昆ニ垂レ、以テ治教ヲ千歳ニ隆ニセンコトヲ図ルニ異ナラズ、乃チ居常孜々トシテ宗祖ノ遺教ヲ発揚シ、門衆ヲ提誨シテ、普ク修心徳化ヲ計リ、以テ報効ノ大義ヲ明カニシテ、皇恩ノ万一ニ酬ヒ奉ランコトヲ期ス、唯微衷ノ至ラザルハ、是レ不敏ノ罪瞿然トシテ恐レ、懔然トシテ憾ム、閣下其レ宏諒ヲ給ヘ、抑々我宗元祖勅諭円光大師ハ、夙ニ智慧第一ノ称アリ、志徳亦一世ニ高シ、本邦從來ノ仏教ハ理義極メテ深シト雖、実行太ダ難キノ憾アリテ、救済ノ本義漸ク疎カラントスルヲ慨シ、一意研尋、遂ニ本邦ニ始メテ新宗ヲ立テ、簡捷普濟ヲ主旨トシテ、広ク利導ノ方途ヲ闡發シ、普遍ノ信仰ヲ鼓吹シテ、行化四辺ニ、洽ク皇室ノ崇敬甚ダ厚ク、将相ヨリ漁樵ニ至リ、上下ノ帰嚮殆ント匹儔ヲ絶テリ、大師輅光退守自ラ処ルト雖、遂ニ延カレテ三朝ノ戒師ト為リ、或ハ法問講經ニ屢々叡慮ニ答ヘ奉リ、恩遇浅カラズ、優渥ノ御沙汰ヲ蒙リシコト渺カラズ、其ノ歿後ニ至リテ尚ホ殊遇絶エズ、特ニ勅ヲ奉シテ大師ノ紀伝ヲ修スルヤ、其ノ稿成ルニ及ヒテ、畏クモ伏見天皇後伏見天皇及後二条天皇各々宸翰ヲ染メサセ給ヒ、尊円法親王亦タ御筆ヲ染メ給ヘリ、大永四年大師ノ年忌ヲ修スルニ当リ、後柏原天皇ハ、特ニ詔勅ヲ下シ給ヒテ、法然上人御忌ト称シ給ヒ、今尚ホ此ノ称ヲ用フルノ光榮ニ浴シ、并ニ前後歷朝屢々嘉号ヲ勅諭シテ、其ノ遺徳ヲ表シ給ヒ、就中、東山天皇元禄十年円光大師ノ嘉号并ニ勅使御差遣以來、孝明天

皇万延二年大師六百五十年忌ニ際シ、慈教大師ノ諡号御加賜ニ至ル迄、五十年忌毎ニ必ス勅会ヲ行ハセラレ、大師号宣下并ニ勅使御差遣ヲ蒙リシ如キハ、他ノ諸宗派ヲ通シテ未タ其ノ比ヲ見ザル特別ノ恒例ナリトス、若シ其レ大師ノ遺跡ナル知恩院ハ、三たび勅額ノ御下賜ヲ蒙リ、又親王教代ノ御重職トシテ門跡ノ称ヲ存セリ、其他歴朝御崇信ニ由レル事歴、亦タ少シトセザルモ、今此ニ列記スルニ違アラズ、若シ亦タ他宗他派ノ祖師ニシテ、古来徽号ヲ賜ハリ、及ビ今上陛下ノ勅諡ヲ蒙リシ類例ハ、其ノ著シキモノヲ別記シテ、閣下参考ノ料ニ資スベシ、惟フニ仏教ノ弘布甚ダ久シク、流伝ノ国土亦タ広ク、各宗派ノ高僧相踵デ薨起シ、恩遇寵眷ヲ忝ウセシモノ尠カラズ、然レドモ我宗祖独リ如上ノ殊遇ヲ蒙リ、特別ノ恒例ヲ保有スルニ至レルハ、洵ニ一宗上下ノ終始感激措クコト能ハズ、七千有余ノ寺院、并ニ海外異境ニ在リテ伝道ニ従事セル法孫、百万ヲ以テ数フル信男信女、相俱ニ丹心ヲ捧ゲテ祖德ヲ後代ニ顕揚シ、遺訓ヲ万衆ニ宣布シテ道德ヲ發揮シ、聊カ政教風化ニ裨補センコトヲ努メ、以テ皇恩ノ万一ニ酬ヒ奉ランコトヲ期スル所ナリ、仰ギ願クハ、閣下現有等ノ至情ヲ洞察セラレ、歴朝殊遇ノ特例ト、古今ノ類例トニ照シ、明年三月円光大師七百年御忌ヲ修行スルニ際シ、至仁至慈ノ優恩ヲ垂レ給ヒテ、嘉号ヲ下シ賜ハラントラ、執奏アランコトヲ、茲ニ歴朝恩遇ノ事歴ヲ抄録シ、勅書写并ニ他ノ類例等ヲ記シ、謹テ添附ス、恐惶頓首

明治四十三年 月 日

京都市下京区林下町

浄土宗総本山知恩院門跡

大僧正 山下 現有 (印)

京都市上京区笹屋町二丁目浄福寺住職

知恩院執事正僧正 吉 水 賢 融 (印)

滋賀県蒲生郡安土町字慈恩寺浄嚴院住職

末寺総代権僧正 大鹿 愍成（印）
三重県阿山郡河合村字田中善福寺住職

同 権僧正 常住 靈穩（印）

大阪市南区逢坂上之町一心寺住職

同 権僧正 前田 聴典（印）

京都市下京区裏寺町称名寺住職

同 権僧正 宇都宮 善道（印）

福井県福井市緑町運正寺住職

同 大僧都 土川 善激（印）

京都市上京区東洞院通御池上ル舟屋町

信徒総代 内貴 甚三郎（印）

同市下京区三条通富小路西入

同 杉浦 三郎兵衛（印）

同市下京区五条通新町東入

同 遠藤 九右衛門（印）

同市下京区大宮通松原下ル

同 井上 治良兵衛（印）

宮内大臣子爵 渡辺 千秋 殿^⑦

〔二〕(写)

本宗開祖勅謚円光大師七百年諱、明治四十四年三月七日正当ニ就キ、嘉号恩賜ノ請願書、別紙之通り総本山知恩院ヨリ捧呈シテ執奏ヲ請ヒ、闕宗上下数百万ノ信徒ト共ニ、追遠報本ノ法儀ヲ嚴修仕度候条、本宗ノ史実、開祖ノ道功等御添簡ノ上、速ニ御詮議ヲ蒙リ候様、御執成相成度、此ノ段特ニ添申仕候也、

明治四十三年十一月廿八日

浄土宗管長大僧正 山下 現有 印

内務大臣法学博士男爵 平 田 東 助 殿

〔三〕 歴朝御崇信ノ事歴要略

後白河天皇

戒ヲ授ケ奉ル (承安四年)

往生要集ヲ宮中ニ進講ス (承安四年)

如法経先達ヲ仰付ラル (文治四年)

御臨終善知識ニ召サル (建久三年)

高倉天皇

戒ヲ授ケ奉ル (安元元年)

中宮上西門院ニ戒ヲ授ケ奉ル (治承三年)

安徳天皇

東大寺再興大勸進上人ノ御沙汰下ル (養和元年)

後鳥羽天皇

勅ヲ奉シ東大寺ニ於テ經ヲ講ス（建久元年）

中宮宜秋門院ニ戒ヲ授ケ奉ル（建久二年）

戒ヲ授ケ奉ル（建久六年）

皇后修明門院ニ戒ヲ授ケ奉ル（建久八年）

四条天皇

華頂尊者ノ号ヲ賜フ（天福二年）

後嵯峨天皇

通明国師ノ号ヲ賜フ（寛元二年）

後伏見天皇

天台宗功德院舜昌、勅ヲ奉シテ法然上人行状画面図巻部四十八卷ヲ上ル（正安元年）

後二条天皇

伏見天皇後伏見天皇法然上人ノ行状ノ詞ニ宸筆ヲ染メサセ給フ（徳治二年）

伏見天皇ハ第四十ノ卷ニ、後伏見天皇ハ第一、第二、第七、第八ノ卷ニ、後二条天皇ハ第十、第廿二、第廿五、第廿六ノ卷並ニ第三十三卷ヨリ第三十九卷迄及第四十二卷ノ十三卷ニ宸筆ヲ染メサセ給フ

第九卷ヨリ第十三卷並ニ第十八卷及第三十卷ハ尊円法親王御筆ヲ染メサセラル（以上正本京都知恩院ニ藏ス）

副本第一、第十一、第三十三ノ卷ハ伏見天皇以上及第八、第二十ノ卷ヲ除クノ外ノ四十三卷ハ後伏見天皇宸筆ヲ染メサセ給フ（以上副本当麻往生院ニ藏ス）

後花園天皇

天下上人無極道心者ノ号ヲ賜フ（永享年中）

後柏原天皇

法然上人御忌ノ詔勅ヲ賜フ（大永四年）

後奈良天皇

光照大士ノ号を賜フ（天文八年）

東山天皇

勅書並ニ円光大師ノ諡号を賜フ（元禄十年）

中御門天皇

勅使御差遣、勅書並ニ東漸大師ノ諡号ヲ加賜セラル（宝永八年）

桃園天皇

勅使御差遣、勅書並ニ慧成大師ノ諡号ヲ加賜セラル（宝曆十一年）

光格天皇

勅使御差遣勅書並ニ弘覚大師ノ諡号ヲ加賜セラル（文化八年）

孝明天皇

勅使ヲ以テ勅書並ニ慈教大師ノ諡号ヲ加賜セラル（万延二年）

〔四〕円光大師遺跡ニ対スル皇室ノ関係

四条天皇 文暦元年 知恩院仏殿ニ大谷寺、廟堂ニ知恩教院、総門ニ華頂山テフ勅額ヲ賜フ

後水尾天皇 元和五年 後陽成天皇第八皇子知恩院門主トナリ良純法親王ト号シ給フ

後西院天皇 明曆二年 後水尾天皇皇子良賢親王知恩院門主トナリ尊光法親王ト号シ給フ
東山天皇 宝永四年 靈元天皇皇子岡宮良邦親王知恩院門主トナリ尊統法親王ト号シ給フ
中御門天皇 享保十二年 靈元天皇皇子榮貞親王知恩院門主トナリ尊胤法親王ト号シ給フ
桃園天皇 宝曆四年 桜町天皇皇子富貴宮和義親王知恩院門主トナリ尊峰法親王ト号シ給フ
光格天皇 文化七年 皇子種宮福道親王知恩院門主トナリ尊超法親王ト号シ給フ
孝明天皇 万延元年 伏見宮邦家親王第十二皇子隆宮博經親王知恩院門主トナリ尊秀法親王ト号シ給フ

〔五〕勅書写[®]

光照大士勅謄

青蓮院宮尊鎮法親王御筆

就当院開山堂額儀、勅謄書令執奏之處、可為光照大士由被仰定間、則題之候、珍重候、内々可被相触門徒中候哉、猶泰憲
法眼可申候也、

八月廿五日 花押

知恩院方丈

表装 茶金襴天地茶絹梅ノ縫

豎一尺一寸 横一尺五寸

円光大師微号

東山天皇勅書

勅王法与仏法比等、内外貴典章、朝家同积家定律、都鄙仰興盛浄土開宗源空上人、先究聖道之教、後闢浄土之宗暗弥陀誓願於胸次、感善導提撕於定中、靚宝樹照妙境内証益明、歩金蓮現靈光、密因忽露即是肉身如来、何疑勢至權跡三朝帝師德重于當時四海良導行応于末代、皇化広布率土法要永伝普天特諡号円光大師

元禄十年正月十八日

青地金欄菊紋章天地

紺地金欄葵紋章

竪一尺二寸 横一尺八寸

二重箱入 水晶軸

東漸大師徽号

中御門天皇勅書

勅円光大師、勢至権跡、慧日照々、高輝台嶽之上、宗風穆々、始開浄土之源、念仏三昧深示群聖之蘊、誓書一紙固結四衆之心、非師之泛慈航、誰離苦海、每人能乘宝筏、自済迷川、遺教邈爾既歴五百星霜、功德浩然爰徧六十州郡、仍重寵章加諡東漸号、

宝永八年正月十八日

表装 青地金欄天地紺地金欄 葵紋章

竪一尺一寸 横一尺八寸

二重箱入 水晶軸

慧成大師徽号

桃園天皇勅書

勅円光東漸大師、心解純真行操高邁、五閎大藏、数感衆聖、講華嚴一乘則青蛇蟠案上、修法華三昧則白象現壇前、円頓妙戒紹正統、浄土要行開本基、弁才之所論、愚者言下領納、道德之攸蒙、明師社中輩出、懋哉、慈悲備足広度群品至矣、智慧成滿深入諸法、今茲当五百五十年忌辰、更加徽号、諡曰慧成大師、

宝曆十一年正月十八日

表装 白茶地金欄天地紺地 金欄

堅一尺一寸五分 横一尺八寸

弘覺大師勅諡

光格天皇勅書

勅朕聞道不自弘、弘必由人、物不自覺、覺必待師、緬惟故吉水源空和尚、少在叡峰、博學之名夙彰、老居吉水、專行之德弥高、戒珠明朗、随和讓其光、慧刃銳利、干鏌愧其鈍、分難易於聖浄、棟優劣於正雜、体二尊之大悲、揚三師之徽猷、於是若善若惡、揖苦域而長別、無賢無愚、望染邦以高馳、貴賤婦嚮、化風扇於一時、緇素信服、慈沢流於百世、嗚呼如和尚、其弘道之哲人覺物之良師乎、三朝先皇、既賜佳号以旌盛德、茲丁六百周之忌辰、朕亦更加以弘覺大師之諡、

文化八年正月十八日

表装 紫地金欄天地紺地 金欄葵紋章

慈教大師徽号

孝明天皇勅書

勅皇家御四海先窮民所以施仁政也、积氏度衆生急昧者所以解倒懸也、浄土元祖円光東漸慧成弘覺大師、德重當時、識高前古、占地則獲吉水勝槩、興宗乃繼終南真風、直入玄門、迥脫大小樞奥之域、横超秘術、永絶焉矣乎哉之詮、浩浩苦海慈航、熙怡樂邦良導、凡聖俱濟蕩蕩乎、民無能名焉、病藥相投、欣欣然拳有喜色焉、可謂、垂庇化之手、資至治之休矣、今年丁于六百五十周忌辰、仍累加崇典、益旌芳躅、宜諡曰慈教大師、

万延二年正月十八日

表装 茶地金欄天地紫地金欄

竪一尺一寸三分 横一尺六寸二分

〔六〕御忌詔勅

大永勅書

詔知恩院住持超奉上人

朕聞挹流派者緬尋其源、愛枝葉者力培其根、蓋知恩教院者、浄宗創業道場、祖師入寂靈跡、遺教布於海内、属刹徧于國中苟為其末流者、寧可忘本源乎、自今而後、遇孟春月、宜令集会京畿門葉、一七晝夜修法然上人御忌也、追遠之誼想應若此、故茲詔示宜知悉矣、

大永四年正月十八日

内箱 柁桐 銀金具 紫紐 横一尺二寸七分 巾四寸

唐櫃 桑 金金具 高一尺八分 横一尺四寸 巾一尺五分 大和錦ノ覆

外箱 黒塗カブセ蓋

台机 桑三尺一寸 巾一尺四寸 高一尺一寸

蒔黄糸 総二箇付甲板八枚 四脚黒金具

〔七〕 謚号御宣下次第

元禄以後五回ノ謚号御宣下、勅使御差遣ノ次第ハ、各五十回忌正当ニ先チ、願意執奏ヲ請ヒ奉レハ、予メ御裁可ヲ与ヘラル、ト共ニ、希望ノ称号アラハ申出ヘシトノ御沙汰アリ、元禄度ハ三様、其他ハ兩様ノ称号ヲ差出シ、其中ニテ御選定、御宣下相成タルモノナリ、而シテ右ハ、御忌会修行七日間中ノ希望ノ日ヲ予メ申請スレハ、当日勅使御差遣、宗祖源空影前ニテ勅書ヲ宣揚セラル、コト、先例トナリ居レリ

〔八〕 古今謚号宣下ノ重ナル類例

往古歴代宣下ノ例

宣下年度	大師号	僧名	宗派
清和天皇 貞観八年	伝教大師	最澄	天台宗
同 同	慈覚大師	円仁	同
醍醐天皇 延長五年	智証大師	円珍	同
後光明天皇 慶安元年	慈眼大師	天海	同
醍醐天皇 延喜廿一年	弘法大師	空海	真言宗

延慶元年	花園天皇	本覺大師	益信	同
東山四年	東山天皇	理源大師	聖寶	同
安永三年	後桃園天皇	道興大師	実慧	同
元禄三年	東山天皇	興教大師	覺鑊	同
安永二年	後桃園天皇	聖応大師	良忍	融通念仏宗
称光二十年	應永二十年	宏覚大師	慧安	臨濟宗

今上天皇御宣下大師号例

明治十六年	慈撰大師	真盛	天台宗
同十五年	慧灯大師	兼寿	真宗
同十六年	月輪大師	俊苒	真言宗
同	無相大師	慧玄	臨濟宗
同十二年	承陽大師	道元	曹洞宗
同四十二年	常濟大師	紹瑾	同
同十九年	円照大師	智真	時宗
同九年	見真大師	親鸞	真宗

右ノ外、国師号禪師号等ノ勅諡并ニ加諡尠カラザルモ、之ヲ略ス、^⑨

明治四十三年十一月二十八日、山下現有は、宮内大臣渡辺千秋への嘉号請願に関する一件書類〔一〕〔二〕〔三〕〔四〕〔五〕〔六〕〔七〕〔八〕を、内務大臣平田東助に執成を依頼する書状〔二二〕とともに送っている。これらの書類は一ヶ月後に平田から渡辺の所に届けられた。

浄土宗知恩院門跡山下現有等ヨリ、来ル明治四十四年浄土宗開祖円光東漸慧成弘覚慈教大師七百年正忌法会ヲ修行スルニ当リ、年期加号恩賜ノ榮典ヲ拝受致度段、請願執成方、特ニ本大臣へ出願ニ付、請願書類及御回送候条、可然御詮儀相成候様致度、此段申進候也、

明治四十三年十二月廿七日

内務大臣法学博士男爵 平田東助（印）

宮内大臣子爵 渡辺千秋殿

（『重要雜錄』内務省宗第一六三五号）

しかしそれから一ヶ月以上もそのままであったことが、次の現有の書状によってわかるのである。

肅啓、閣下倍御健勝被遊御座候間、為邦之大幸不過之、奉恭賀候、陳者、昨年来閣下之御仁慈ヲ以願上居候我宗祖円光大師七百年ニ就キ、嘉号恩賜之義、其後如何相成候哉、右法要者三月一日ヨリ執行致候事トテ、時日誠ニ目睫之間ニ迫リ、老納ハ不申及、宗内数百万ノ道俗日夜ニ鶴首相待申居候、本願書列挙致置候通、我宗開祖ハ、歴代皇室ノ御寵眷ヲ辱フセシヲ始メ、毎五十年忌ニハ必ラス嘉号追諡ノ恩典ヨリ勅会法要ニ至ルマテ、無上ノ光榮ヲ荷ヒシヲ以テ、今回モ亦其恩沢ニ浴シテ、一層忠勤ヲ励マン事ヲ企図致居候、然ルニ不幸ニシテ此御恩典無御座候ハ、一宗道俗ノ落胆ハ、実ニ悲愴慘怛之域ニ達スルナラント、窃ニ痛神致居候、由来我國ノ仏教ハ、皇

室ノ御保護ノ下ニ發達シ、臣民ト頗ル密接ノ關係アリテ、之レカタメ拳国一致ノ精神ヲ涵養致シ来リタル事ナレハ、今回ノ年忌ニ際シテ、更ニ此關係ヲ知ラシメ、一宗道俗ノ意嚮ヲ一ニシテ、忠君愛國ノ精神ヲ鼓吹スルハ、是レ聊カ老衲カ国家ニ対スル義務ナラント、恐察仕居候、万一ニモ皇室ト臣民トヲ疎隔スルノ心念ヲ、一毫ニテモ懷カシメ候テハ、一宗数百万ノ道俗ヲ率フル老衲トシテ、国家ニ対シ、将タ宗祖ニ対シ、寔ニ不相濟儀ト存シ、日夜焦心致居候、唯閣下ノ明鑒事情御推察被成下、何卒出格ノ御恩典ニ浴セン事ヲ御執奏被成下度、此段不遜ヲ顧ミス、敢テ奉懇願候、

恐惶謹言

明治四十四年二月十七日

知恩院門跡

山下 現 有

宮内大臣子爵 渡 辺 千 秋 殿

〔重要雜録〕

いかなる理由でそのままになっていたのか、はたして意図的にひきのばしたのかどうかはわからない。この文面を見ると、法要を間近にして、一宗を代表する現有がいささか焦燥感に煽られていることは事実である。しかし意図するところは実に正鵠を得ている。すなわち近代天皇制の充実をめざしてやまない明治政府に対して、天皇と国民の本来的あり方を容認するが故に、多くの浄土宗信徒をして側面から忠勤をもつてのぞましめるためには、どうしても先例にならってほしいと言葉巧みに表現している。そして嘉号を拝受すること自体が、一人の国民として、また一宗の管長としての自分の唯一の使命であるというのである。ところがその後も何の音沙汰もなく、詮議中という噂あるのみで、現有は引続き次のような手紙を出している。

拝啓、昨日予而上願仕置候宗祖円光大師加号之義、御詮議中ト相承仕候、愈々御許可被仰出候節者、前例ニ随ヒ、別紙御参考之為ニ差上候間、宜敷御詮議相成度、尚又御宣下之義ハ、法会開白之前日ニ被仰出候前例ニ有之候間、可相成ハ本月廿八日ニ拝受仕候様、御執成之程、併而奉願上候、恐惶再拝、

明治四十二年二月廿五日

浄土宗管長

大僧正 山下 現有

宮内大臣

子爵 渡辺 千秋 殿

〔重要雜錄〕

したがってこの書状では、ある程度見込ありとみて検討されていることを念頭におき、さらに次の具体的な対応にふれている。すなわち文中「前例ニ随ヒ、別紙御参考之為ニ差上候間」とあるのは、最終的に浄土宗から希望する二つの嘉号を申請し、その一つをえらびとるという方法をさすのであり、『重要雜錄』には「明照」「明信」と記した折紙がある。またささやかな督促をかねて「御宣下之義ハ、法会開白之前日ニ被仰出候前例ニ有之候間」として二十八日という期日まで指定していることは、許容範囲を暗に指摘していることにもなる。しかし二十五日付のこの書状が、渡辺千秋の手に届けられる前に、すでに宮内省では着手していたようである。すなわち二月二十五日付をもつて大臣は裁可を仰ぎ、即日許可され、その「按」を作成している。

按

円光東漸慧成弘覚慈教大師

加謚明照大師

明照大師嘉号請願考

圓光東漸慧成弘覺慈教大師

加謚明照大師

天	皇
御	璽

明治四十四年

二月二十七日

宮内大臣從二位勳一等子爵

渡邊千秋奉

淨土宗 知恩院

今般特旨ヲ以テ其

宗開祖圓光東漸慧

成弘覺慈教大師へ

加謚宣下候事

明治四十四年

二月二十七日

宮内省

明治四十四年二月廿七日^④

宮内大臣爵姓名奉

〔重要雜錄〕

これに準じて作成されたものが広く知られている文面（前頁）である。現有が書状を出した二十五日、参内の公文書が発せられ、二十六日午後東上した。^⑤翌二十七日予定をはるかに越えて午前八時五十七分新橋に到着し、十時参内の予定も遅れたが、ついに悲願の嘉号拝受となった。

午前十一時十分皇居を退出して増上寺で奉告式を行い、渡辺邸を訪問してその日の夜行列車で西下している。^⑥当時の八十歳前後の老僧にしては、かなり厳しい行程であった。拝受してのちただちに「訓示」^⑦を発し、翌二十八日帰洛して大師前に次のように奉告している。

奉告

謹で宗祖円光東漸慧成弘覺慈教大師の廟前に跪き恭しく奉告す、大師化を施すこと良に遠く、徳を植うることに良に深し、是を以て法流四海に瀾漫し、門葉八紘に垂布し、古今其沢に霑ひ、中外其慶に頼る、歴朝の天子頻に叡崇を加へ、宇内の黎庶齊しく盛徳を仰ぐ、茲に七百年御忌を奉修するに丁り、今上天皇陛下大師の続行を聞召し、忝なく聖旨を下して累ねて明照大師の徽号を賜ふ、遺法の弟子現有恭しく勅書を奉じ、之を大師の宝前に捧ぐ、仰ぎ冀くは本地の慧光を輝して弟子の至誠を照鑑し、摂化の宝手を垂れて嘉例の崇典を享け給はんことを、敬て白す、

明治四十四年二月廿八日

浄土宗管長 大僧正 山下 現有^⑧

四

明照大師の嘉号は、このような経過のもとに下賜された。辻善之助^⑧は「但明照大師のは、諡の上に、加の字を添られ、加諡と記されてある。又太政官が、内閣となった以後の分は、太政大臣が、宮内大臣と記されたるのみ、総体に於ては、みな同一の文法であるから、臣下への贈位の宣文と、同一の文体である」とその書式についてのべている。

さらに「歴代仏教、御崇信の天皇の正統たる、明治天皇が、孝明天皇以前の先蹤を履ませられずに、大師、国師号、贈諡の宣旨を、臣下に贈位せらるゝのと、同一の形式を用ひられたのは、如何なる思食であつたか、我等の伺ひ知る所でないが、惟ふに、維新以来、皇室と仏教との關係は、全く断絶せられてあるから、古昔の如く、信仏の叡慮でなく、大師、国師号を、たゞ一種の称号として、諡せられた様に、伺はるゝのである。特に先帝、一代中に、大多數の諡号のあつたのは、有史以来の異数である、これ国師、大師号を、単に軽く、称号とせられた故にあらざるか、（中略）故に諡号と、御信仏とは、全く各別のものと見るのが至当である」と説明していることに留意しておかねばならぬであらう。

また「明照」の文字の由来について『浄土教報』には「明字は実に昭代年号の記念とも窺ふべきものにして、且つ宮内大臣の申達もあり、必らず

之を明照と拝読し奉るべきこと。

を伝へられ、之が典拠としては、観經の光明徧照の全文及礼讃の相好光明照十方の両文を提示す^⑨と報じている。

本稿で紹介したこの請願に関する一件書類は、現有が丹精こめて書きあげたものである。宮内庁に現存する正本と知恩院にある副本を手にして拝読したとき、当時の大僧正の嘉号請願への計り知れない真摯な態度が思い浮かべられるのである。一宗を率いる最長老としての大なる責任感をしてそうなさしめたという、単純な動機だけではなさそうで、

本人自身のかぎりない宗祖への思慕と愛宗護法の問題が、老軀をおして筆を走らせたようである。この請願一件書類をみて、大遠忌の徽号の由来や皇室と宗祖または浄土宗との関係を知ることができる。そして従来の先例をみれば等閑視するわけにもいかなかったようでもある。「一」にみる「門衆ヲ提誨シテ、普ク修心徳化ヲ計リ、以テ報効ノ大義ヲ明カニシテ、皇恩ノ万一二酬ヒ奉ランコトヲ期ス」は、明治後半期によくみられる内容で『教育勅語』の大綱と一致する。また「七千有余ノ寺院、并ニ海外異境ニ在リテ伝道ニ従事セル法孫、百万ヲ以テ数フル信男信女云々」は、かの日清日露両戦争に際し、従軍慰問使が活躍した布教の実績をふまえての表現である。危惧された嘉号も無事拝受して盛大裏に実施されたこの七百年大遠忌法要は、まさに明治における浄土宗の動向すべてが集大成されたものといつても過言ではない。

しかし、辻善之助の指摘する一文は、今日我々をして襟を正さしめる内容でもあり、このような批判的な見解もあったという事実を、よく熟知しておく必要がある。

明治天皇は、画図面に、僧の在るすら、之を好ませられずに、其幅を下戻せと、仰られたに就ても、其御信仰の如何は、克く伺はるゝのである。然らば、先帝の勅慮と仏教とは、極めて距離のあったものと、伺ふのが至当の見解であろう。然るに仏教者中に、彼の諡号、勅額等を援引し、剩へ種々の妄説を附会し、以て先帝の、御信仏をいふのは、却て先帝の勅旨に反するのである。（中略）兎も角、皇威を借て、教法を弘めんとする、旧式思想は、宗教界より排斥せねばならぬ、宗教は人の信否に依らず、たとへば人は信ぜずとも、独り自己の、是とする所に依て、堅き信念を養ひ、堅実なる不動的に、熱烈なる自信を披瀝し、以て他をも感化せしむるのが、宗教家の本務である事を、忘れてはならぬ。

註

- ① 拙稿「記念伝道実施方法の成立とその展開」

（『坪井後英博士
頌壽記念』）

（『仏教文化論攷』所収）。

- ② 同書二六二五頁、六四一三頁。

③ 『浄土学』二六所収。

④ 大臣官房総務課「自明治四十三年至明治四十四年」の部、表記に「嘉号恩賜請願、浄土宗知恩院門跡大僧正山下現外九名」とある。

⑤ 五六〇頁。

⑥ 『重要雑録』には「井上治良兵衛」の氏名捺印はない、また月日は「十一月二十八日」とある。

⑦ 天保十四年生、信濃出身、明治二十五年内務次官、二十七年貴族院議員、同年十一月中井知事の急死により京都府知事となる、三十三年伊藤内閣の宮内大臣となり、のち華族に列せられ伯爵となる、正三等勲一等、大正十年七十七歳死去。

⑧ 『知恩院史』の文字と若干異なる所もあるが、現有自筆の原本をそのまま記述した。

⑨ 辻善之助著『維新後教遭難史論』（大正十四年、国光社出版部刊）二五八―九頁には、明治時代の諡号十一（大師号九、国師号二）が紹介されており、そこにはこの表以外に次の三つが列記されている。

明治十二年 円鑑大師 妙心寺第二祖授翁和尚（万里

小路藤房）

明治十七年 正宗国師 臨濟中祖白隠禪師

明治四十四年 明照大師 浄土宗祖法然上人。

⑩ 宝田氏前掲論文によれば、「慈教」「法隆」の微号勸文案と勸書文案各一通を用意したようである。

⑪ 『重要雑録』

⑬ この年月日「四十四、二、廿七」は、後に加筆されたものである。

⑭ 『浄土教報』第九百四十五号。

⑫⑬⑭⑮⑯ 『浄土教報』号外「加謚宣下特別記念号」、訓示は『知恩院史』六四二頁にもある。

⑰ 以下辻氏前掲書二五九頁、二六〇頁、二六四頁、二六五頁、二七九頁、二八〇頁、参考までに次の史料を紹介しておく。

<p>釈 親 鸞</p> <p>諡 見真大師</p> <p>太政大臣従一位三条実美 奉</p> <p>天皇</p> <p>明治九年十一月二十八日</p> <p>御 璽</p>

⑱ 拙稿「近代における浄土宗教団の研究——日清戦争従軍慰問使覚書」（『日本私学教育研究所紀要』第十七号所収）参照。

〔参考史料〕

円光大師七百年忌執行ニ付殿下御台臨請願

本年三月一日ヨリ七日マテ、四月十九日ヨリ二十五日マテノ期間ニ於テ、宗祖円光大師七百年忌ヲ執行致候ニ就テハ、宮殿下ノ御台臨ヲ仰キ奉ランコトヲ、茲ニ閣下ノ言上ヲ請願ス、

惟フニ、殿下報本反始ノ御賢慮海ヨリモ深ク、知恩報恩ノ御芳志山ヨリ高シ、是ヲ以テ忠孝子ノ遺徳ヲ旌表シ、賢人聖者ノ芳躅ヲ追慕シ給フコト多ク、慈恩千古ノ枯骨ニ及フ、感泣曷ソ堪ヘン、抑々当山知恩院ハ、殿下ト御因縁殊ニ厚ク、曇日傳經親王ハ、万延元年当山淨嚴ニ就テ入室得度遊ハサレ、尊秀法親王ト称シ給ヒ、翌年宗祖円光大師六百五十回忌勅会ノ御導師ヲ勤メサセラレ、御信仰最モ深ク、明治元年御復飾アリト雖モ、御信仰旧時ニ変ラセ給ハス、爾束星霜ヲ経ルコト五十年、今ヤ宗祖円光大師七百年忌ヲ修スルニ丁リ、殿下御先代ノ御遺徳ヲ継紹遊ハサセラレ、我宗祖ニ一片ノ燃香ヲ賜フハ、一ハ以テ反始報恩ノ賢慮ニ協ヒ、一ハ以テ賢人孝子ヲ推奨シ給フノ途

ナラン歟ト恐察仕候、

仰キ願クハ、殿下深高ノ御賢慮ヲ以テ、来ル三月一日ヨリ七日マテ、及四月十九日ヨリ二十五日の期間ニ於テ、当山ニ御台臨御聴許ノ義ヲ、閣下ヨリ言上アラシメテ請願仕候、恐惶謹言、

明治四十四年 月 日

華頂山知恩院門跡

大僧正 山下 現有

華頂官

家人 田中寿三郎 殿

